

地上に花氈を敷が如く、一時の壯觀たり、

〔守國公御傳記五〕江戸本所深川出水ノ時、動モスレバ屋宇迄沒シ、溺死等モ少カラザレバ、公○松平定  
信建議シテ高キ臺ヲ三ヶ所ニ作り、中洲永代橋ト大橋ノ間也ヲ取拂ヒ、水患ヲ免ル、事ヲ得タリ、享保頃  
墨水ノ堤ニ植玉ヒシ櫻ノ殘少クナリシヲ、有司ニ命ジテ植續セ玉フ、今ハ雪トモ雲トモナリテ、  
都下ノ人隅田川ノ櫻トテ、盛ニ賞スルハ是也、

〔江戸名所圖會十五〕飛鳥山 敷萬歩に越たる芝生の丘山にして、春花秋草夏涼冬雪眺あるの勝地なり、始元亨年中、豊島左衛門、飛鳥祠を移す祭神事代主命なり因て飛鳥山の號あり、寛永年中、王子權現御造營の時、此山上にある飛鳥祠を遷して、權現の社頭に鎮座なしけり、其後元文の頃、台命によつて、櫻樹數千株を植せらる、内には遊観の便とし、外には菟堺の爲にす、年を越て花木林となる、爾より騒人墨客は句を摘、章を尋ぬ、牧童樵夫は秣を刈、薪をとる、殊にきさらきやよひの頃は櫻花爛熳として尋常の觀にあらず、熊野の古式に春は花を以て祀るといへるに相合するもの歟、

〔有德院殿御實紀附錄十六〕吹上の御庭に櫻楓の苗多く叢生したるを御覽ありて、小納戸松平専助當恒賀守後伊によくやしなふべしと命ぜられしにより、別に花欄を設け、懇につちかひ水す、ぎけるに、いくほどなく其苗五六尺ばかりになりしかば、廣尾隅田川のほとり、又は飛鳥山に植られし、其中にも飛鳥山は享保五年九月より植はじめて、凡櫻二百七十株、楓百本、松百本植られしに、櫻はわきて年を逐て枝葉玄げり、花の時は燦爛として美觀をなせり、其地は小十人のなにがしが采邑なりしを外にうつされ、元文二年二月十日、山をば王子權現の祠僧金輪寺宥衛にたまはりて、永く社頭に寄附せらる、もとの祠は紀伊國熊野權現をうつしたるゆゑに、公○吉宗徳川御發祥の地の鎮守を、はやくよりいはひそめしことをおぼしめされ、かくはなされしなるべし、其つ